

四つの共同幻想(物神化)——国家・宗教(神)・貨幣・人権

共同幻想ということばは、そもそもマルクスが『ドイツ・イデオロギー』の中で、「国家=共同幻想体と規定したことに始まるのでしょうか？」このことは、他の資本主義的概念に援用することができます。実は、認識論的には、共同幻想論よりも物象化や物象化の絶対化という「物神化」という概念で説明していくことの方が論理的になっていくのですが、説明が難しくなるので、一般に使われている「共同幻想」ということばで説明していきます。

「国家=共同幻想」規定について

さて、マルクスの国家=共同幻想論は、『ドイツ・イデオロギー』がその基幹部分が長く草稿のままだったこともあり、また編輯問題での草稿性があり、捨て置かれていました。そのあたりは、主流のマルクス改釈とその実践的展開とされた「マルクス—レーニン主義」において、レーニンが『ドイツ・イデオロギー』を読んでおらず、国家の共同幻想論を知らなかったという定説があり国家=軍事的官僚的統治機構論という国家論が凌駕していました。ですが、実は、レーニンを読み直していくと、マルクスが書簡の中で、国家の共同幻想的性格を書いていることを、レーニンがメモとしてのこしていることがあります。レーニンは、自らの国家論構築でそのことを無視したのです。そもそも、マルクスにしても国家の共同幻想的性格を押さえてその革命論を展開しているわけではありません。そのことが幾分なりともあるとしたら、「共産主義者には国境は無い」という国際連帯規定と世界革命論、国家の死滅論でしょうか？ですが、そもそも、マルクスが武装蜂起→プロレタリア独裁→社会主義権力の樹立という路線を維持し続けたのは、当事の国家権力の専制政治性もあったにせよ、この国家=共同幻想論をきちんと押さえ展開し得なかつたこともあったのではとわたしはとらえ返しています。そのことは、第一次世界大戦で国際連帯の中心的存在であり、議会でかなりの勢力をもっていたドイツ社会民主党がいとも簡単に愛国主義という国家主義に飲み込まれていったことに端的に示されています。

そのことは、民主主義をまがりなりにも標榜する国家において現在も続いている、そもそも各国会が国家とか国益の論理にいとも簡単にからめとられていく構図がみてとれます。他の国を人権侵害国と規定し、民主主義を守るのだと軍事的侵略までなしてきたアメリカが、自国ファーストなどという論理で、「人権破壊」を世界に広めようとしています。逆のとらえかたをすると、各国がまさに自国の権力を維持するために、戦争の危機をあおり、戦争を起こし、軍産複合体的資本主義を維持していくという構図さえ出てきています。まさに、今日、ファシズム論の核心としての国家主義ということをおさえ、そこにおける国家=共同幻想体的なことをおさえ、戦争とファシズム的なことの隆起と展開に反対するために、「国家=共同幻想」規定をおさえ直すことが今、問われているのです。

宗教=神という共同幻想

さて、哲学の世界では古くに、神の死が宣言されました。未だに、宗教的世界観に世

界は覆われています。神とは、自然の不可解さや不思議さの物象化ということで、更に、それを絶対化(=物神化)することにおいて成立するのですが、今日的に、論理性のかけらもない、教祖の金儲け主義が露骨化したカルト的宗教が跋扈しています。

わたしは、そもそも自然への恐怖というところでの宗教の出発点的なところは、そしてアニミズム的世界観は「自然に適う生き方」という核科学者から反原発に転じた高木仁三郎さんの定言にとらえられることにも通じ、全否定されることでもないとは思うのです。ですが、そもそもキリスト教の十字軍や差別主義的宗教で、軋轢と葛藤を生み出すような宗教世界は、共同幻想の核となっていくこと、今日、「政治指導者」の個人崇拜化という共同幻想も含めて徹底的に批判していく必要があると思います。

「貨幣=共同幻想」規定

脳科学者の養老孟司さんがテレビ朝日の「ニュースステーション」でキャスターの古館さんとの対談で、貨幣という共同幻想を語っていました。資本主義社会の秘密に関することをマスコミのニュース番組で語っていいのかなと驚いて聞いていたのですが、そもそも、きれいに印刷した紙にすぎないものでなぜ、商品を買えるのかということは、既成観念にとらわれない何でも疑問を抱く子どもも疑問に抱くことなのでしょうが、そして養老さんは科学者として独自にそんな思いを抱いたのかも知れないのでですが、そもそもマルクスが『資本論』の中で「貨幣の物神的性格とその秘密」で展開している内容です。

そして、この世は金に支配される社会という言い方で、この貨幣ということが、ひとのモノ化・社会の矛盾の最大限の象徴として現れてきています。

「人権=共同幻想」規定

さて、これはかなりあやうい議論になります。自民党右派の片山さつき議員が「人権など架空の概念だ」とぶらさがりで答えてる映像を見ました。わたしもかねてから、そのようなことを言ってきたのです。これはそもそもキリスト教的世界観での、「天賦人権思想」からきていることで、いわゆる、<帝国>中枢国は「資本とキリスト教と人権思想」を三位一体的に世界に押し付けたと言い得ることです。そもそも、物象化論からとらえれば、人権とは差別のない関係の物象化といいえることです。ですから、人権は架空の概念としても、そもそも人権思想のもつ正の側面である、反差別まで否定するのかどうかという事が問題になります。

さて、ここで問題になるのは、人権という概念を突きだしていくと、個別反差別の羅列的突き出しにしかなってこなかったという歴史が出て来ます。ルソーの人権論が、性差別を問題にしていなかった、「労働者の人権」ということも問題にしていなかったということがあり、障害差別に至っては、日本国憲法には「障害者の人権」という文言はなく、国際法に照らしてや、類推的遡及ということで継ぎ足し的にしか問題にしてこなかったということがあります。そもそも、今日的には、人権概念ではなく、差別ということを総体的にとらえて、「差別の構造」というところから、個別差別をとらえ返し、更に「差別の構造」の中身を深化していく作業が必要になります。そこで、その核心のこととして前号巻頭

言の末尾に書いた、能力や意識の内自化というところからとらえ返した、「能力のコモン」というところまで至る作業と、そこから新しい社会像を描くことが必要になっているのです。

(み)

(「反差別原論」への断章」(97) としても)